
共同研究の経緯と概要

高田貫太

本報告書は、2014年度から2016年度にかけて実施した国立歴史民俗博物館共同研究「古墳時代・三国時代における日朝関係史の再構築—倭と栄山江流域の関係を中心に—」の成果をまとめたものである。

1. 目的と方法

本共同研究の目的は、古墳時代（朝鮮半島の三国時代）における日朝関係史像を、朝鮮半島西南部の栄山江流域と倭という観点から再構築することにある。

古墳時代は、日本列島の倭人社会が朝鮮半島から先進文化を盛んに受容した時期である。これまでの日本側の研究においては、古墳時代における朝鮮半島からの先進文化の受容の契機として、倭王権の軍事的活動を重視してきた。多くの場合、日本列島各地で出土する朝鮮半島系の遺構、遺物の導入過程は「倭王権による朝鮮出兵→獲得した品物や技術者の独占→地方への配布」という枠組みで（ある時は、朝鮮出兵を軍事的提携と置き換えて）説明されてきた。

しかし、近年の調査、研究の進展によって、軍事的契機のみならず、より恒常的かつ多元的な交渉の様態が想定できるようになり、朝鮮半島諸勢力の側にも明確な交渉意図があったことも想定されている。このような研究動向を踏まえ、本共同研究ではこれまで付随的、補完的に解釈されてきた朝鮮半島西南部、栄山江流域と日本列島の交渉の実態を再構築することを目的とする。栄山江流域をフィールドとして選択した理由、ならびに具体的な研究目的は大きく2つある。

1つは、近年、栄山江流域で確認されている前方後円墳の性格を明らかにすることが、日朝交渉の動向を考えるうえで不可避的な研究課題となっている点である。この課題に迫るためには、前方後円墳のみに焦点を定めるだけでは不十分であり、その地を根拠地とした政治勢力（時に馬韓とも称される社会）の社会統合の度合いを検討する必要性が生じている。近年の発掘調査、研究の成果によって、その検討を具体的に推し進めることが可能となっている。したがって、集落・墳墓資料の分析から当地域に位置した栄山江流域社会の構造を明らかにしていく中で、前方後円墳が造営された歴史的背景を探り、それを受容した栄山江流域と倭の交渉の様態を再構成していくことを目的とした。

2つめは、栄山江流域社会の側から当時の対倭交渉の目的や様態を明らかにしていくことが可能である点である。当時の朝鮮半島においては、様々な政治的な緊張関係が生じており、栄山江流域社会も百済の社会統合の動きへの対応を迫られていたことは確かである。よって、栄山江流域の側がどのような意図で倭との交渉に臨んだのかという観点を踏まえ、当時の交渉様態を明らかにしていくことは、栄山江流域社会の構造を考えるうえでも重要である。この点に焦点を定めて、単なる

交流史にとどまらない地域社会論を展開したい。これは、これまでとかく倭王権の政治経済的立場でのみ解釈されてきた日朝関係史像を再構築していくことにつながると考える。

以上のような研究目的を達成するために、日韓において古墳時代や三国時代の対外関係史や集落論、あるいは社会構造論を専門としている研究者で研究組織を構成することとした。そして、構成メンバーの中で、日本人研究者と韓国人研究者の数をほぼ同数とし、密接な議論を通して双方の理解を深めていくことをめざした。

そのために、栄山江流域において集落や古墳の調査・研究を活発に行っている大韓文化財研究院と国立歴史民俗博物館の間で学術交流協定を締結し、李暎澈院長に韓国側の共同研究の運営など関する協力を仰ぐこととした。そして協議を重ねる中で、より具体的な研究目的を以下のように定めた。

- ① 倭と栄山江流域の墓制や生活遺跡の検討に基づき、双方の社会論を深める。
- ② 墓制や生活遺跡の検討に基づき、倭と栄山江流域の対外交渉の実態を検討する。
- ③ 栄山江流域の前方後円墳の特質や歴史的意義について検討する。

そして、各年度において2回の全体共同研究会（日本側1回、韓国側1回）を開催することとし、適宜、個々の共同研究員が遺跡踏査や資料調査を行うこととした。

2. 研究組織（肩書は2014年当時）

〔共同研究員〕

日本側

- 中久保辰夫 大阪大学文学部（朝鮮半島系土器、渡来人論）
山本孝文 日本大学文学部（横穴式石室からみた栄山江流域・百済）
諫早直人 奈良文化財研究所都城発掘調査部（金工品から見た栄山江流域と倭）
右島和夫 群馬県立歴史博物館（東国の対朝鮮半島交渉）
仁藤敦史 本館研究部（文献史からみた栄山江流域と倭）
○上野祥史 本館研究部（鏡・甲冑からみた栄山江流域と倭）
◎高田貫太 本館研究部（研究総括）

韓国側

- ◎李 暎 澈 大韓文化財研究院（集落からみた栄山江流域）
鄭 一 大韓文化財研究院（土器からみた栄山江流域）
林 智 娜 大韓文化財研究院（栄山江流域の墓制と前方後円墳）
権 五 栄 ソウル大学校国史学科（東アジアにおける栄・山江流域・百済・倭）
李 正 鎬 東新大学校公演展示企画学科（墳墓からみた栄山江流域）
金 洛 中 全北大学校考古文化人類学科（墳墓からみた栄山江流域と倭）
李 昌 熙 東国大学校考古美術史学科（放射性炭素年代測定とその評価）

〔リサーチアシスタント〕

- 金 跳 咏 総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史専攻・後期博士課程

3. 研究の経過

〈2013年度〉

- 事前研究会（2014年3月19～20日 大韓文化財研究院）

2014年度からの3年にわたる共同研究の開始にあたって、2014年3月19～20日に事前研究会を大韓文化財研究会において実施した。学術交流協定締結式を行った後に、共同研究の趣旨と役割について、高田と李暎澈氏が説明を行った。次に、高田が「5・6世紀朝鮮半島西南部における倭系古墳の築造背景」という題目で研究発表を行った。また、栄山江流域の諸地域に点在する高塚古墳を踏査し、その出土遺物を調査した。

〈2014年度〉

【研究会など】

- 第1回共同研究会（8月1～2日 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

東日本地域の中で、朝鮮半島系文化が特に色濃い地域である群馬県において、遺跡踏査と研究会を行った。コーディネーターは右島和夫氏にお願いをした。

研究会では、李暎澈氏の発表によって、墓制や集落構造の双方から栄山江流域社会の構造復元案が提示された。また、超大型の竪穴住居が確認された羅州東水洞温水遺跡の調査成果も報告された。日本側では、東日本地域の良好な集落遺跡たる渋川市金井東裏遺跡の調査成果が報告された。

また、金井東裏遺跡、金井下新田遺跡の発掘調査現場、集落が復元されている中筋遺跡などの遺跡踏査を行い、出土遺物の調査も行った。

杉山秀宏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）「金井東裏遺跡の発掘調査成果」

李 暎 澈「羅州東水洞温水遺跡の発掘調査成果」

李 暎 澈「栄山江流域における古代集落の変動過程と背景」

- 第2回共同研究会（2015年3月14～15日 大韓文化財研究院）

栄山江流域と倭の関係の特徴づける前方後円墳の踏査と、共同研究会を行った。研究会では、まず李正鎬氏が、近年朝鮮半島西南海岸域であいついで確認されている5世紀前半代の倭系古墳の1つ、新安ベノリ古墳の造営背景について発表した。次に、山本孝文氏が、横穴式石室の造営技法の観点から、百済と栄山江流域の交流について発表した。

また、光州、高敞、咸平、霊岩などの栄山江流域の諸地域を巡検し、その中で前方後円墳の立地や墳丘構造、周辺遺跡について踏査を行った。

李 正 鎬「新安ベノリ古墳の築造背景」

山本孝文「横穴式石室の築造技法からみた百済と湖南地方一熊津期百済と高敞地域を中心に一」

- 国際シンポジウムの共催（11月28日 韓国国立羅州博物館）

当初の計画にはなかったが、李暎澈氏の提案を受けて、栄山江流域と倭の交流史をテーマとした国際シンポジウム『영산강유역 고분 토목기술의 여정과 시간을 찾아서（栄山江流域の古墳における土木技術の旅程と時間を求めて）』を大韓文化財研究院主催、歴博共催の形で行うこととした。日本側からは高田と中久保辰夫氏が発表を行った。

高田貫太「5, 6世紀朝鮮半島西南部における『倭系古墳』の造営背景」

中久保辰夫「倭系遺物の年代論」

【成果】

2014年度は、「栄山江流域の墓制や生活遺跡の検討に基づき、当該地域の社会論を深める」という研究課題を設定し、十分に達成することができたと考えている。

第1回共同研究会における李暎澈氏の発表によって、墓制や集落遺跡の双方から栄山江流域社会の構造復元案が提示され、それに対する議論がかなりの深まりをみせた。特に、日韓両学界において古墳のみならず集落から地域社会を検討していく必要性について問題意識を共有しえること、また、栄山江流域と群馬県地域において集落構造を比較考古学の観点から相互に検討しえることが確認された。これは、栄山江流域社会の復元そのものと同時に日韓の集落研究の比較検討という点からも非常に重要な成果であったと考える。

東日本地域の良好な集落遺跡たる金井東裏遺跡・金井下新田遺跡の発掘調査現場を実際に踏査し、そこに認められる朝鮮半島系渡来人の活動の痕跡から、域社会における渡来人もしくは外来系文化の影響をどのように考えるかという点についても、研究会の中で議論を行うことができた。

年度当初には計画はなかったが、急きょ11月に国際シンポジウムを共催することが決定し、その準備のため、中久保氏が韓国の日本列島系土器の調査を行い、相互の編年についての理解を深めることができた。シンポジウムにおける発表を通して、この共同研究の内容について韓国側も深い関心を寄せていることがうかがえた。

第2回の共同研究会では、栄山江流域に分布する前方後円墳を実際に踏査し、その立地について検討した。その結果、従来孤立的とされてきたが、実は在地の古墳と連動するような形で築かれている側面もあることを認識できた。さらに、墳丘形態や埋葬施設、副葬品には倭のみならず、百済などとの関わりも認められること、それが在地の古墳にも認められることが明らかとなった。さらに、5世紀前半から倭系古墳が築かれている状況が明らかになり、6世紀前半の栄山江流域における前方後円墳の造営にいたるまで、両地域の交流が継続的に行われていたことが確認された。その概要を李正鎬氏が発表した。

また、栄山江流域の墓制にみられる外部からの影響についての解釈は、百済中央の強い政治的な影響力とみるのか、それとも栄山江流域社会の自律性を評価するのかなど、研究員の間でも議論が多様である。その中で山本氏が横穴式石室の築造技法からみた場合、百済と栄山江流域の関係は、より地域間の錯綜した交流であった可能性が高いと指摘した点は重要であった。

〈2015年度〉

【研究会など】

- 事前協議（5月20日 大韓文化財研究院）

大韓文化財研究院が学術調査を行った高敞七岩里前方後円墳の巡検とあわせて、高田が大韓文化財研究院を訪問し、2015年度計画の協議を行った。

- 第3回共同研究会（7月31日～8月1日 奈良文化財研究所都城発掘調査部藤原地区）

栄山江流域と近畿地域における集落構造や土器編年に関する研究会を行った。あわせて、西日本

地域の中で、百済・栄山江流域系の土器が集落や古墳から出土している奈良県、和歌山県の遺跡踏査、出土資料の調査を行った。

まず、鄭一氏が栄山江流域における集落の動向と土器の変遷について発表した。また、中久保辰夫氏が5、6世紀の近畿地域における集落の動向と土器の変遷について発表した。両氏の発表において、両地域の集落動向が密に連動している可能性が提起され、それについての議論が行われた。

また、和歌山県鳴神地区遺跡の出土資料の調査の中で、これまで栄山江流域系と判断された土器の中には、少なからず錦江流域などの中西部地域に系譜を追えるものがふくまれていることが、提起された。

鄭 一「栄山江流域における2～6世紀の集落動向」

中久保辰夫「5・6世紀における近畿地域の集落と古墳」

- 第4回共同研究会（2月24日～2月26日 韓国全羅北道全州市、全羅南道東部地域）

墓制や副葬品からみた栄山江流域・百済と倭の交渉についての研究会を行った。また、栄山江流域・百済と大加耶の接境地域である全羅南道東部地域の古墳踏査、出土資料の調査を行った。

まず、金洛中氏が栄山江流域における5、6世紀の墓制を概観し、その中で倭や百済との政治的な関係について発表を行った。次に、諫早直人氏が、栄山江流域から出土した馬具を取り上げ、その系譜関係や出土古墳の性格について発表した。両氏の発表を通して、墓制からみた栄山江流域社会と倭の交渉の実態について、かなり踏み込んだ議論を交わすことができた。

金 洛 中「古墳からみた栄山江流域・百済と倭」

諫早直人「韓・倭の馬具—栄山江流域出土馬具を中心に—」

- 歴博国際シンポジウムの開催（2016年3月5、6日 歴博）

3月5～6日に歴博国際シンポジウム『古代日韓交渉の実態』を開催した。特に、それまでの研究成果の中間報告として、〈セクション2 栄山江流域・百済と倭の交渉〉を位置づけた。研究代表の高田が座長を務め、李暎澈、金洛中、中久保辰夫、諫早直人の4名が、それぞれの分担課題についての発表を行った。また、権五栄、李正鎬、上野祥史が各発表についてのコメントを行った。そして、シンポジウムの翌日には、東京湾東岸地域の古墳踏査を行った。

李 暎 澈「集落からみた栄山江流域・百済と倭」

金 洛 中「古墳からみた栄山江流域・百済と倭」

中久保辰夫「土器・集落からみた5・6世紀の栄山江流域と倭の相互交渉」

諫早直人「韓・倭の馬具—栄山江流域出土馬具を中心に—」

【成果】

2015年度の年度の目標であった、「栄山江流域の墓制や生活遺跡の検討に基づき、栄山江流域の対外交渉の実態を検討する」という研究課題は十分に達成されたと考えている。

まず、第3回目の鄭一氏、中久保氏の発表によって、栄山江流域と倭の集落変動が相互に連動していることが提示された。これによって、墳墓資料が中心であった両地域の交流の分析が、集落遺跡においても推し進められていく必要性が認識された。また、奈良、和歌山県地域の栄山江流域系土器を詳細に調査することによって、その系譜が栄山江流域に限定されるというよりも、錦江流域をはじめとするより広範な地域に求め得ることも議論の俎上に上った。すなわち、栄山江流域と倭

の交流を考えていくためには、栄山江流域周縁の地域とのつながりも考えていく必要性が生じてきたのである。

このような状況で、第4回の共同研究会を全羅南道東部地域で開催できたことは非常に有益であった。この研究会では、金洛中氏にこれまでの墓制研究からみた百済・栄山江流域と倭の交流について総括していただき、諫早氏に近年、出土例が相次ぐ栄山江流域の馬具資料と倭や大加耶との関わりについて発表いただいた。これによって、集落、墓制を合わせる形で交渉史を再構築していくことが可能となった。さらに、百済、栄山江流域、そして大加耶の接境地域である全南東部地域の墓制や出土遺物を調査することによって、その多様性と背後にある活発な対外関係の状況を認識することができた。

このように研究会における議論がかなり進展し、時空間的に共通の土台で交渉史を検討していくことが可能となったため、共同研究員各自の研究成果の中間報告をかねて、2016年3月6日に歴博国際シンポジウムを開催した。その中で、墓制や集落からみた栄山江流域社会の構造、栄山江流域社会と倭の交渉、栄山江流域における前方後円墳造営の背景などについて総合討論を行った。

〈2016年度〉

【研究会など】

- 事前協議（5月25～26日 大韓文化財研究院）

2016年度の共同研究会についての事前協議を大韓文化財研究院にて行った。また、栄山江流域の各地から出土が相次ぐ埴輪についての資料調査を行った。

- 第5回共同研究会（8月5日～8月7日 鹿児島大学総合博物館）

前方後円墳がきずかれた地域圏の周縁部という点で、栄山江流域と共通性をみせる南九州地域において、共同研究会を開催した。まず、第4回研究会のつながりの中で、上野祥史氏が鏡からみた倭と朝鮮半島の交渉について、栄山江流域に焦点を定めて発表を行った。鏡の授受関係においては、倭王権側の明確な政治的意図がうかがえることと同時に、栄山江流域社会においてその意図をどれだけ把握していたかについても考慮する必要性について指摘した。

次に、古墳や埋葬施設の築造技術におけるつながりという観点から、林智娜氏と右島和夫氏が発表を行った。まず林智娜氏は、栄山江流域における古墳墳丘の築造技術の変遷を整理し、その中で5世紀中葉～6世紀前半の高塚古墳において、倭における古墳築造技術の影響が読み取れる要素が存在することを指摘した。また、右島和夫氏は、上毛野地域における横穴式石室の受容の様相について発表を行った。その中で、横穴式石室の受容という観点から、比較考古学的に栄山江流域の状況についても検討している。

遺跡踏査では、前方後円墳の分布域の周縁部における多様な墓制という観点から、栄山江流域と南九州（特に肝付平野・えびの市周辺）の状況を比較検討した。また、近年では南九州地域でも栄山江流域との関係をしめす土器や武器が確認され、実際の両地域の交渉のあり方についても議論した。踏査にあたっては、橋本達也氏（鹿児島大学総合博物館）に研究協力者として協力いただいた。

上野祥史「朝鮮半島出土鏡と倭の鏡」

林智娜「栄山江流域における古墳墳丘の築造技術」

右島和夫「毛野地域における横穴式石室の登場とその様相—石室・墳丘の構造的検討を通して考える—」

• 国際シンポジウム（10月14日 韓国全羅南道潭陽郡）

学術交流協定に基づいて、大韓文化財研究院主催の国際シンポジウム「潭陽台木里遺跡をめぐる」に、高田が討論者として参加した。台木里遺跡は3～5世紀代の栄山江流域における拠点集落の1つであり、その実態と遺跡保全・活用に関して議論を行った。

• 遺跡踏査（2017年2月3～4日 群馬県）

集落、土器を担当分野とする共同研究員（李暎澈、鄭一、中久保）と上野、高田が群馬県金井東裏・下新田遺跡の発掘調査現場を踏査し、古墳時代の集落構造についての調査を行った。また、金井東裏遺跡で確認された古墳（1号墳）の埋葬施設と栄山江流域の潭陽西玉古墳群の埋葬施設との類似性について知見を深め、議論を行った。

• 第6回共同研究会（2017年2月19～21日 韓国大田広域市）

栄山江流域と百済の政治経済的な関係を検討するために、錦江流域の遺跡踏査を行うこととし、あわせて共同研究会を開催した。まず、李昌熙氏が、放射性炭素年代測定法を軸として、古墳時代・三国時代における日本列島と朝鮮半島の暦年代をどのように整合させていくべきか、について論じた。

次に、仁藤敦史氏が日本古代史学の立場から、5世紀後半以降に加耶地域に居住した倭人集団、6世紀における倭系百済官僚あるいは倭系人の実態について論じ、栄山江流域の前方後円墳の被葬者像について北九州をふくむ倭系豪族と想定した。そして権五栄氏が韓国古代史の立場から、栄山江流域の前方後円墳をめぐる議論の諸々の課題を整理し、「馬韓」の定義の問題や、中国-朝鮮半島-倭を取り巻く交流史の中で前方後円墳を理解する必要性を提起した。

遺跡踏査では、熊津百済期の中心である公州地域を踏査し、あわせて王宮である公山城から出土した鉄製品（馬冑、蛇行状鉄器）の資料調査を行った。また、漢城百済期の横穴式石室墳が展開する燕岐宋院里古墳群や、各種の金銅製品が出土した古墳や大規模な集落が確認された燕岐羅城里遺跡を踏査し、その出土遺物についても調査を行った。

李昌熙「放射性炭素年代測定と暦年代—三国時代・古墳時代—」

仁藤敦史「倭・百済間の人的交通と外交—倭人の移住と倭系百済官僚—」

権五栄「栄山江流域の古代政治体を検討する多様な視角」

【成果】

共同研究会の最終年度に当たる2016年度の研究課題は、それまでの研究成果に基づいて、①栄山江流域の前方後円墳の特質や歴史的意義について検討すること、②そのなかで、日朝関係史ひいては東アジア交流史における歴史的な位置づけを目指すことであった。結論的には、この課題は十分に達成することができたと考えている。

まず、第5回の研究会を南九州地域で開催することになったきっかけは、2016年3月6日の国際シンポジウムの中で、倭と栄山江流域について海を隔てた異なる地域と先験的にみなすのではなく、前方後円墳の分布域としての共通性も認識する必要があるのではないか、ということが日韓の共同研究員の中で、共有されたためである。このこと自体が、大きなパラダイム転換であったと考

える。また、第5回研究会で、上野祥史氏が倭と栄山江流域を鏡の授受が行われた圏域として一体として把握し、その中で分配者側（倭王権）の論理と受け取る側（栄山江流域）の論理のズレを論じたことと密接に関連している。

実際に、前方後円墳がきずかれた地域圏の周縁部という点で、栄山江流域と共通性をみせる肝属平野周辺域を踏査するなかで、栄山江流域における前方後円墳の造営背景をまた別の角度から検討することができた。特に、栄山江流域には専用甕棺や「多葬」、高塚などを特徴とする在地の墓制が展開し多様性をみせているが、南九州地域においても、地下式横穴墓や板石積石棺墓など在地に定着している墓制が展開している。そのような墓制と前方後円墳の関連性の把握の仕方に、比較研究が可能であろう。

また、林智娜氏と右島和夫氏が、墳丘築造と横穴式石室構築の技術的な側面における両地域の相関性を論じたことによって、両地域の関係が非常に多面的で、双方の墓制に影響を及ぼしあった状況がさらに浮き彫りとなった。

第6回研究会（平成29年2月開催予定）を百済圏たる錦江流域で開催したことは、これまで単に栄山江流域系とよばれてきた5、6世紀の日本列島出土朝鮮半島系土器が、より幅広い地域に系譜を求めることができるのではないかと、という問題意識からである。資料調査において、金工品や馬具なども倭とのつながりをしめす資料が確認され、その特徴についても議論を深めることができた。その中で、栄山江流域と倭の関係を検討していくためには、百済や加耶などとの関係もふくみこませることが必要である、という認識を共同研究員の間で共有することができた。

そして、考古学のみならず自然科学的な研究（李昌熙）、古代史学（仁藤敦史・権五栄）の発表によって、多様な方法論とその総合化の中で、倭と栄山江流域の関係史を描いていく必要性についても浮き彫りにすることができた。

なお、2016年度より、高田は科学研究費補助金（基盤研究（C））『朝鮮半島西南部の前方後円墳をめぐる倭と馬韓の交渉史』（研究代表者：高田貫太、課題番号：16K03173）に採択された。その連携研究者の一人である廣瀬覚氏にも研究会にゲストスピーカーとして参加いただき、特に栄山江流域から出土した埴輪についての検討をお願いした。その研究成果も本報告にあわせて掲載している。

4. 共同研究の成果と今後の課題

「1. 目的と方法」で述べたように、3年にわたった本共同研究の課題は、古墳時代、三国時代における日朝関係史像を、栄山江流域と倭の関係という観点から再構築することにあつた。研究会における議論は、集落、墓制、埋葬施設、埴輪、土器、金工品、馬匹、古墳築造技術と多岐にわたるが、それを高田が共同研究の成果としてまとめると、次のようになる。

まず、栄山江流域における古墳や集落、そして土器生産の動向を具体的に把握できた。すなわち、5世紀初頭、中葉、そして5世紀末～6世紀初に集落や古墳の変動が確認でき、そこには百済圏の生活や墓制の様式の伝播とともに、倭との交流も大きな要因となっていたことについて、研究員の間でかなり共通した認識を持つことができた。そして、栄山江流域に点在する集落や古墳の規模や構造が、5世紀中ごろに序列化することを指摘し、そこに大きな政治的変動を想定することが可能となった。

それに関連して議論が重ねられたのは、栄山江流域社会がはたしてどのような社会だったのか、についてである。かつては独自の社会（馬韓とよぶこともある）とみる見方と、百済の一地方、あるいは百済の間接支配下にある地域社会とみる見方などが提示されていた。今回の共同研究においても、栄山江流域社会の実態についての認識は、研究員の間で議論が続いた。上述の政治的な変動を百済の領域への編入とみるか、それとも百済との関係の中でも主体的な成長とみるのかについては、さまざまな見解が提示された。この点についての、高田の見解をあえて述べれば、6世紀前半までの栄山江流域は、百済との関係の中でも主体的な成長をとげていた社会（地域社会）と判断している。そして、栄山江流域において前方後円墳の造営が終了し、百済中央の墓制たる「陵山里型石室」の受容をもって、百済に編入されたとみる。

しかしながら、このような問題は百済が独自の社会かというような二者択一の性格のものではない。百済との栄山江流域の長期的な関係の変化の中で、栄山江流域という地域の側から検討していく必要性については、共通理解がうまれたと考えている。

次に、倭との交流関係については、5, 6世紀にみられる畿内地域と栄山江流域における集落変動は、連動している可能性が高いことを指摘できた。双方向的な密接な交流関係によって海を渡った渡来系集団が、両地域の集落再編に大きな役割をはたしていたことが浮き彫りになっており、そこには両地域を取り巻く大きな社会変動があるのでは、という見通しを提示できされた。

この点に関連して、栄山江流域と倭の関係は、前方後円墳がきずかれた6世紀前半に急激に密接なものとなったと短期的に考えるよりも、少なくとも3～6世紀にかけての長期的で双方向的なものであったと把握する必要がある。したがって、栄山江流域社会の側にも、倭と交流を重ねる明確な目的があり、それに基づいて活発な交流活動をおこなっていた可能性が高い。そのような歴史的な動向の中で、栄山江流域に前方後円墳がきずかれたと推定できる。

そして、栄山江流域で確認されている前方後円墳の性格についてである。今回の共同研究を通して、栄山江流域の前方後円墳には、埋葬施設や副葬品、外表施設（葺石や埴輪）などに、倭以外にも実に多様な要素（栄山江流域、百済、加耶など）が認められることが、あらためて確認された。また、在地の伝統的な古墳（方台形古墳や円墳）にも、倭や百済の埋葬施設や副葬品が認められることも明らかとなった。そして、咸平杓山1号墳のように、3, 4世紀から連綿と墳墓がきずかれていく墓域に位置する事例も確認され、在地の造墓活動の中で、前方後円墳がきずかれる状況も指摘できた。

それによって、これまで考えられてきたように、前方後円墳をきずいた集団と在地の伝統的な古墳をきずいた集団の関係が、単純に「排他的・対立的」な関係ではなく、対立や協調をふくみこんだ「併存的」な関係であることが浮き彫りになりつつある。少なくとも、栄山江流域の前方後円墳が単に特殊な墓制ではなく、栄山江流域社会なりの特質や伝統も内包されている点については、各研究員の間で共通の理解となっている。そして、栄山江流域社会が百済の社会統合の動きへ対応する1つの方策として、前方後円墳を採用したという評価が、定まりつつある。ただし、この点については共同研究員の中で今も議論が続いている。今後の課題としたい。

以上、研究の主な成果と今後の課題についてまとめた。本報告では各共同研究員の論考を収録しているが、その理解の助けとなれば、幸いである。

最後に、本共同研究のもう1つの課題として、日韓で共通して先史・古代の日朝関係史を議論していくための学術的な基盤を形成していくことがあった。本共同研究の最大の特徴は、日本と韓国の7名ずつの研究者が、相互に訪問し合い現地の遺跡や遺物を調査し、その場で研究会を開催するという方式を、一過性のものでなく、3年という長期にわたって重ねたことにある。研究の背景や環境が似ているようでも相異なる日韓の研究者が、相互に配慮しながらも深く議論を行う場は、それほど多くはない。3年間の共同研究を通して、日韓それぞれの研究員が、単に相手側の研究状況を知るといった程度ではなく、みずからフィールドとする地域を知るためには相手側の状況と比較検討する必要がある、ということ深く認識するようになったと考えている。

このような研究会を円滑に推進するためには、日韓の信頼関係が必須である。そのために歴博は、栄山江流域における調査、研究を精力的に推し進める韓国大韓文化財研究院（李暎澈院長）と国際交流協定を締結し、日韓の研究機関同士の事業として本共同研究を立ち上げた。それによって、栄山江流域の前方後円墳という、とかく自国の側の論理を貫徹させようとしがちな研究テーマについて、冷静にそして深く議論することができ、今後につづく学術的な基盤を形成することができたと自己評価したい。

(国立歴史民俗博物館研究部)



大韓文化財研究院にて



鹿児島県塚崎古墳群にて



公州公山城をバックに